

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	或る歴史家の歩み(二) : IGM・トレヴェリンの場合
Author(s)	今井, 宏
Citation	歴研月報(22): 1-4
Issue Date	1953-11
URL	http://hdl.handle.net/10109/8648
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

或る正史家の歩み (二)

I.G.M. トレヴェリアンの場合

今井 宏

- (一) 以下本文
- (二) (以上完了)
- (三) 以下本文
- (四) 以下本文

かくて正史家トレヴェリアンは誕生した。だが彼が正史専攻の学生となつた途端に遭遇したのが、彼が今まで考へかつ理想としていた正史に対するシーリー教授の攻撃であつたことは、(いわば象徴的な出来事であつた。カーライルやマコーレーに対する罵倒に憤慨しながらも彼は、シーリーの言葉が「正史の科学と文学に対する関係に関する私の見解を充分注意深く考へさせ、十年ばかり後に私が攻撃を開始した論争の準備をさせてくれた」宛を感謝している。この論争といふのは、巨頭にしてはヒュアリーとの間にその就任演説をめぐって行われたものであつた。そこでトレヴェリアンは文学的存正史を擁護し、当時流行の正史は科学なりとする理論に攻撃を加えたのである。論争はきわめて學問的に何らの

私情は含まれなかつた。「シーリーと違つてヒュアリーは真に科学的な正史家だつたから」。

曇々云々様にトレヴェリアンの理想としたのは、ギボン・カーライル・マコーレーに見られる如き正史叙述である。勿論そうは云つものの、かゝる正史叙述に見られる欠点を認めるにはやむを得ない。たしかに彼等は史料の蒐集には異常な熱意を示した。だがその解釈たるや曇々欠点だらけであり史料を校訂する科学的な精神が欠如している。従つて彼は正史の科学性の主張のレーゾン・デートルを充分認め、その原因として「大学に於ける正史教育と試験との重要性が増大したこと、學問に対するドイツ流の觀念の侵入、(三)物理学研究の目ざましき進歩、をあげている。

だがこの「文学的存正史」に対する反動が彼にとつて我慢のならなかつたのは、それが「証拠をはかるのに科学的な方法の必要を強調したことではなく、文学的な技法を正史家の仕事にはかかわりなきものとして消極的に放棄したこと」であつた。正史はあらゆる教養の基礎をなすもの、それ故に正史は

無味乾燥な専門家同士の煩瑣な話し合いをきめて広く大衆に語りかけねばならない。正史叙述を魅力的ならしめることに正史家は関心を拂わねばならぬ。だからこそ次の彼の主義は生まれて来たのであつた。「正史は科学と芸術の両方である。即ち史実を発見することは方法において科学的でなければならぬ。けれどもその史実を讀者に説明することは芸術―普通に文学と呼ばれる書かれた言葉の芸術の性格を帯びるものである」。ここで「正史と文学は離れ難き雙生児である」といふことになり、「正史のモチーフは根本において詩的なものである」と主張される。

ところで正史のモチーフが詩的であるとは一体どういふことであるか。これこそカーライルの本領とするところであり、又彼のカーライルに対する憤慨の生れて来る所以であつた。「一般的に言つて私は最も散文的存正史分でも正史を業んだ。何故ならそれらが一旦過去にひつこむと詩的となるから」といふのは少年時代を回想しての彼の言葉である。だが次の列程この言葉の意味を良く伝えるものはないだろう。一九〇四年ジャネット・パンと結婚した彼一人の友人がお祝ひと

してガリバルデイの回顧録とその時代のイタリヤ史の書物をくれた。ある日何気なくペー子をめぐりガリバルデイのローマからアドリア海への渡却のどころを読んだ彼は、ふとかつて（一八九七年）西親と共にこの時も父を子チエローネとしてローマに遊んだ時、ヤニキニラムの丘で市街を見下ろしながら聞いたガリバルデイのローマ防衛の話、又その時「心の中に何かを移し植えられた」様に感じたことを思い出したのである。「むしむいっか『文学的存正史』が書けるなら、これこそ又とないチャンスであった」「烈しい想像力の興奮にとりつかれ、駆り立てられた人の様に「彼は仕事にとりかゝった。大英博物館などに史料を漁り、更に何度も自身ガリバルデイの古戦場を歩きまわった。この労作は一九〇七年から一二年にかけて「ガリバルデイのローマ共和国防衛」「ガリバルデイと千人の義勇兵」「ガリバルデイとイタリヤの形成」の三部作として世に出たのであった。もう一つの例は「ジョーン・フライト板」に就く「選挙法改正案のグレイ卿」の場合である。その著者の動機を彼は「不満と圧迫の長い冬の後にやってくる来た輝かしい夏」この場合は選挙法改正

の夏だが「は私の夢、 又にびつたりするものである」と言 いる。かくて彼にあっては正史のモティフは詩的なのである。トレウエリアンの著述活動を通ずる著しい特徴としては、彼の風光明媚なる地への愛着と孤独な散步癖の存せるわざであるが、必ず彼自ら親しくその正史の舞臺を毎度となく訪れ史料を漁り見聞をひろめていることが挙げられよう。こうして彼はその正史の中に生き過ぎと共感を共にしながら想像力を発揮し、その詩人的存正史に駆り立てられて著述にあたるのである。だが彼は忘れてはいない。正史家の方法としてはあくまで科学的であることを。

これより先一九〇三年の春学期を最後に、彼は正史家としての彼をばくみ育てて呉れた思い出多き母校ケムスリツチに別れを告げている。その決心を堅めさせたものには様々の事情があったことであろう。しかし彼の語る当時の心境はこうである。「私は正史をかくだめにもっとゆつくりした時間、自分の勉強の時間が欲しかった。……又私はむしろ文學的存正史をかこうと思つたら、ケムスリツチの學者仲間の評判的存夢思気から遠く離れ

くべきなどの気がした。シリーが死んだからはケムスリツチのすべての正史家は私にとても親切だった。けれどもうけれど私はケムスリツチの気配のさわつてもわからぬい様な束縛を感れたのだ。これ以後生活に何ら煩わされることのない彼は、大空の外にあって、ボエテック存己れの心の赴くま、に悠々として前に挙げた様な数多くの著述にたずさわつたのであった。

一九一四年に勃発した世界大戦は彼に思わぬ聖戦を与えることになった。「これまであまりにも學者的な正史家であつた」彼は四年間正史の研究を中断して、現実界の活動に飛びこみ、イタリヤ戦線のエギリス赤十字病院の指揮官をつとめたのである。戦火をくぐつての激斗の中で彼はそのイタリヤに肉する知識を充分發揮して渉外事務にあつた。

たしかにこの戦時の特異な経験は、狭い党派的な偏見と安易なオステイミスムから彼を救つてくれた良友、寄与すること大きかった。だが平和の訪れと共に「私は再び正史の本を書くことにしようとの考えだけを抱えてイギリスに帰った。私はこの世で他に野心はなかつた」。正史家トレウエリアンは前にもまじ

て旺盛な著述活動を始める。一九二二年には「十九世紀の英國史」が世に現われ、翌年からの四年間には大著「英國史」の著述に彼は没頭する。それは「これまで英國史について読みかつ考えたすべての集積・要約」であったが、一九二六年四月出版されるや、それがイギリス史の全領域の必要部分を含み、それの「敘述も学校や大学を含めた廣汎な大家に比ざわしいもの」であったために「英國社会史」を除いては最も歡迎された。であった。

(四)

一九二七年、彼は時の首相ホールドウィンの推挙により、ピュアリー、死去の後をうけて、ケムブリッジ大学欽定講座教授になった。ケムブリッジを去ってから既に四半世紀の時は流れていた。若き日、イギリス史学の伝統に固執して、シリー・アクトン・ピュアリーと異なるある意味でのケムブリッジ史学の伝統に反逆した彼は、かくて母校に迎え入れられイギリス史学界の大御所の地位に就くことになったのである。講義をしたり、大学院学生を指導したりしながらも、彼は自分の仕事を余す余が充分残されていた。自ら「ガリバルティを除いては最高の出来」という大著「

アン女王下のイングリッド」三巻はかゝる日々の所産であった。

二二でも彼は執筆の動機を語っている。「三十年前卒業試験の特許課程にスペイン継承戦役を以て以来、私はアン女王の治世の物語をしようと思つて見た。大伯父マコーレーの意圖の背後にあつたらう。しかし本當はスチュアート朝とハノーヴァー朝の間にその特有な^{エトス}をもちつて横たわる一七二二年から四年といふ時期のドラマチックな結合と分離に惹きつけられたのである」と。史料探究の旅を続ける彼は、旧家で伝来の古文書を演じているとイギリス史の連続という魅力たつぷりな観念に襲われる。などとかいている。この仕事を通じて彼に有益な助力を惜しまなかつた人に、オックスフォードのサー、チャールス・フアースがいた。彼はこの時期に關する英國史の最高权威ではあつたが、自らはまるで執筆の存い人であつた。ある日二人で彼の書棚から取り出した本のページをくつて、彼は「トレヴェリアンに笑ひながらこう云つた。『君はこんな密い連中について書きた

いといつも思つている。だけと僕はたゞ読みたいと思つただけだ。』と。この言葉の中に二人の正史家の性格の対照をこえて、トレヴェリアンの真面目がいかになく表現されているではないか。

トレヴェリアンは一刻もその活動を休めない。「アン女王」の著三巻の出版された一九三四年には「一六八八年のイギリス革命」を執筆し、次いで直ちに彼は世界大戦中の外相エドワード・グレーの伝記に着手する。この三年間にもわたる著述は隣人として親く交わりその人格に傾倒しての「愛の著作」であつた。次の仕事は一九三七年からの「英國社会史」である。それは先の「英國史」の姉妹版とでもいふべきもので、政治を除いた至清社会の発展の跡を辿らんとする試みであつた。「英國史」の場合に省略されたウィクリフ以前時代にもさかのぼるが彼の希望は通り、来る第二次大戦の危機のために妨げられ、「チヨースーよりウィクトリアに至る」六世紀向に局限されてしまつたけれども。この「英國社会史」は雨戦の数年月後には脱稿されていた。しかし用紙の欠乏のためイギリスでは出版できず、ちよつと一九四四年アメリカで出

版されて目の目を見たのであった。だがそれは圧倒的な売れ行きを示した。彼のこれまでの著作の中、最もよく売れたのは「英國史」の二十万、「十九世紀の英國史」の六万八千である。しかもこの兩者とも教科書として使われた数が多い。ところがこの「英國社会史」は試験には至極不向きであったにも拘らず、実に三十九万二千（一九四九年までに）という大部数を売りつくした。その上大部分はイギリスで、「私はかくも多くの同胞が、彼等の祖先に関する私の記述を興味と同感とをもちて読んだことを知り、喜びかつ感動した。私はこの成功に全くびっくりにしてしまつた。

正史を専門家の狭いサークルから解放して再び国民大衆の教養の糧たらしめん。彼の一生を貫くこの宿願はこゝに果されたかに見える。トレヴェリアンの満足を「知るべきものがあろう。

ケムブリッジの停年を前にして一九四〇年首相チャーチルの推挙により母校トリニティの学長とほつた彼は、戦中戦後の困難存時期にその職務に献身した。そして一九四七年に迎えたトリニティ創立四百年記念祭を、その自叙伝は感激をこめて物語っている。だが

それにひきかえ彼は正史家としての活動を断念してしまつたかに見える。「英國社会史」の成功に己れの課題は解決しつくされたとも思つたのか。それとも寄る年数には争えぬと感ずるのか。自叙伝に見られる限りどうも後者の所爲らしい。「もう私は年をとりすぎて真面目な正史の本をかくことは出来ない。それは史料を集めて校訂し、それを文学的な形式に移し交えるといふ二重の努力なのであり私の残つてゐる力をはるかにこえた長い努力が要るからだ。」との淋しげな言葉でその自叙伝は結ばれてゐるのである。

〔附記〕

私がこゝに使つた材料は、トレヴェリアンの「ある正史家の自叙伝」(An Autobiography of an Historian) 「正史と読者」(History and the Reader) である。この二つは共に一九四九年出版。G.M. Trevelyan: Autobiography and How Easy に收められてゐる。尚「正史と読者」に就ては既に本誌第1号に谷叔棟氏による簡にして要を得たる紹介がある。(東大大学院、西洋史)

秋葉家史料を通して
見らるる水海道村

石塚 光男

水海道は地理的位置からいって、西に鹿野川と、東に小貝川、新川の最も接近してゐる所に在り、水海道は代官領として千五百石余であるが、その地方の中心として、又その特殊な河川交通上の要地として江戸時代に於ける繁栄は著しいものであった。従つてそこを中心とする貨幣経済の地方への浸透も當然予想されるものであり、地主秋葉家史料を中心とした調査は近世農村の実体を把握する上に貴重なるものであった。私はこの史料調査によつて得たことを概括的に考へてみた。

この調査は瀧谷先生始め、正史研究会日本史部十一名の協同研究によるものである。

水海道村の地勢は台、横町、大森寺等の洪積層からなる丘陵地帯と、新町以東の沖積層から成る低地帯に分けられ現在洪積層地帯は濠地区域として、沖積層地帯は商業地区として発達してゐる。